

天正少年使節 九州から出帆、日本と世界を結ぶ

日本の戦国時代末期、伊東マンショを中心とする少年4人を日本からの使節としてヨーロッパに送り出した天正少年遣欧使節については知る人、興味深く学んでいる人が多いだろう。今回は、その一員で北九州との関連が関心を集めている中浦ジュリアンをはじめ彼らの、その真実を探る。

1579年(天正7年)7月、イエ

ズス会東インド巡察師のアレッシヤンドウロ・ヴァリニャーノが島原半島南端の口之津港に上陸。京などを巡って織田信長に寵愛され、日本に布教への明るい希望を見出して有馬(現・南島原市)と安土にイエズス会の初等教育機関セミナリオを開設。第一期生22人が、うち中浦ジュリアンら4少年も南蛮人バチレンの要請で有馬のセミナリオに入った。

少年使節団 長崎から出帆

1582年(天正10年)2月、長崎からローマに向けて彼ら少年遣欧使節団が南蛮船で出帆した。正使・伊東マンショ、千々和ミゲル、副使中浦ジュリアン、原マルチノ。指導者はヴァリニャーノで、他に日本人修道士ロヨラ、



中浦ジュリアン

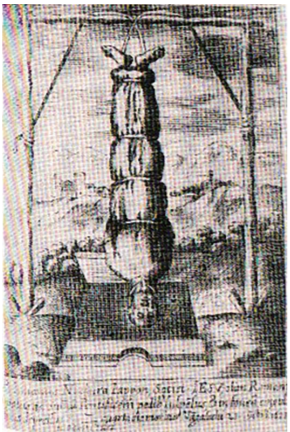
随員ドラードロも合わせて10人。使節団派遣の意図についてヴァリニャーノは、日本でのイエズス会布教促進に教皇、ポルトガル国王、キリスト教徒、母国などから援助を仰ぐ。日本人にはヨーロッパ、キリスト教世界の教会の偉大さ、権威を知らしめるためセミナリオの少年を大友、有馬、大村三候の名代として派遣することを企図した、とみられる。ちなみに、伊東マンショは日向国主伊東家出身でしかも豊後の大友家と血縁関係、千々和ミゲルは島原半島の有馬家や大村家と縁戚、原マルチノは大村領主の親族、ただ中浦ジュリアンは長崎県西彼杵半島の寒村・波佐見出身ということだけでセミナリオ入学の経緯は不明とされる。

等を抱きしめた。その2ヶ月後、グレゴリオ13世は突如、病で世を去った。臨終に際して「日本の公子たちはどうしているか」が最後の言葉だったという。ただ後任の新教皇シスト5世も彼らを戴冠式に招くなど手厚くもてなし数々の栄誉を与えたという。一行は同年6月にはローマを離れ、翌年4月、「サン・フェリーペ号」でヨーロッパ大陸を後にした。同船には日本での布教事業への助成金として教皇や諸侯たちから贈られた金銀、聖具などが積み込まれた。うち、金銭や物品の総額は1万20000クルザード(当時のポルトガルの通貨単位。現在の日本円で総計5〜6億円か)にのぼっていた。

だが、当時の日本は豊臣秀吉関白の時代。一行がマカオに入港した時、秀吉によるキリシタン、イエズス会迫害が行われていることを知らされた。日本への入国許可を願い出、秀吉の許可「査証」

が届いて長崎へ帰港したのは1590年(天正18年)7月20日過ぎのことだった。1582年(天正10年)2月、日本を出発して往復8年の旅だった。一行は帰国翌年の1月、聚楽第で秀吉に謁見した。

徳川政権になっての慶長年間の1610年ごろ、小倉城下の人口約6000人のうち2000人以上がキリシタンだったとの説がある。だが徳川家康が1614年(慶長19年)、禁教令を上呈、



中浦ジュリアン殉教の図

小倉藩主細川忠興もキリシタン弾圧へ一変した。その忠興は1620年(元和6年)、小倉藩主家督を3男忠利に譲り、忠利は密かにキリシタンを擁護。母ガラシャの追悼ミサを司祭した中浦ジュリアンを匿った。また忠興の次男興秋が当時、香春町採銅所の不可思議寺住職で、やはり体調悪化に苦しむ中浦ジュリアンを保護し、投薬で回復させたと言われる。忠利は1632年(寛永9年)10月、肥後藩主を拝領、後任の小倉藩主に明石から小笠原忠真が入部した。その直後、中浦ジュリアンを捕縛した。忠真は譜代大名で徳川幕府への忠誠を、いち早く実行したということだろうが、小倉藩キリシタンにとって受難の始まりだった。

中浦ジュリアン小倉で捕縛 長崎で殉教

ジュリアンは翌1633年9月19日、長崎の西坂で、穴の中での逆さ吊り刑に処され殉教した。65歳。彼はこの時、「私はローマを見た中浦ジュリアンである」と叫び、最期まで少年遣欧使節として、そして日本人司祭としての矜持を貫いた。彼の殉教図はイエズス会によってヨーロッパに伝えられ、ヨーロッパで幕府のキリシタン弾圧への批判が拡大していった。1876年7月7日、福者に列せられた。

なお、他の3人のその後は、伊東マンショは1612年11月、長崎のイエズス会の学院で病没。43歳。原マルチノは1629年10月、マカオで病死。60歳。

千々和ミゲルは1606年ごろ棄教した。彼等の事績を、史料や自ら足跡を追って30年以上も追い求めた歴史家、故松田毅一氏はその著「天正遣欧使節」で、「この使節行がヨーロッパ・キリシト教世界に日本と日本人を知らしめた貢献はおそらく私たちが今、一般に想像するよりも大いなるものがあつたのではあるまいか。――中略――天正遣欧使節。私はこれを東西交渉史上の壮挙として讃嘆を禁じ得ない」と結んでいる。

シニアスタッフ 村田和夫

※写真はいずれも松田毅一氏書「天正遣欧使節」(講談社学術文庫)より